

## 『とい』の小畑

-追悼小畑精和-

松崎一平

昨年(2012年)の11月22日、『とい』の長年の同人であった小畑精和が、二年にわたる闘病生活のすえに亡くなった。悲しい。残念でならない。

小畑から届いた最後のeメールは、わたしが添付ファイルで献呈した「叙事詩の冥府行」(*Vestigia Cordis*、第3号、アウグスティヌス研究会編、2013年、所収)という短いエッセイに対するもので、昨年7月15日付け、内容は以下のとおり。

松崎一平さま、

ご高論、拝受いたしました。

旺盛な研究心、執筆意欲に感心いたします。

「オデュッセイア」から「神曲」まで、もちろん貴兄の主たる関心は「告白」なのでしょうが、壮大なスケールの論文だと拝察いたします。

「一人称」と「三人称」の語り、興味がひかれます。楽しみに読ませていただきます。

当方、一昨年に下咽頭に腫瘍がみつかったから、入退院を繰り返しております。今年はサバチカルで授業は休ませてもらっております。しかし、何とか生きながらえております。あと少し書き残したいものもあります。

貴兄に見習い、何とか形にできればと思っております。

まずはお礼まで。

読むとすぐに、わたしは返信した。

松崎です。

返信していただき、ありがとうございます。

なお闘病中とのこと、こころよりお見舞い申し上げます。御快癒されることを、またお仕事が無事成し遂げられることを、お祈りいたします。

昨今、自分の無力を実感することが多いです。そのようなとき、人間にとっての「祈り」というもののかけがえのなさを実感します。

どうぞ、生き抜いてくださいますよう、こころよりお祈り申し上げます。

小畑は、1972年4月に京都大学文学部に入学し、教養部で『とい』の同人の大半と同じクラスに属した、いわゆるクラスメートである。ただし他の同人が教養部時代からの遊び仲間でもあったのにたいし、小畑は『とい』をほぼ唯一の場として交流してきた。『とい』創刊のころ（1981年9月）、たまたま小畑は、千葉真也が勤務していた短期大学で非常勤講師をしていて、編集の中心にいた千葉をとおして『とい』の創刊を知り、第2号（1982年9月刊）に「虚構の崩壊」を投稿した。その後、明治大学に勤務するようになって東京に移り、『とい』を支援する意図で同人となり、第5号（1985年）から第11号（1991年）まで、ほぼ毎号、時事的な批評的エッセイや翻訳を掲載した。以下のとおり、全部で9編になる。

「虚構の崩壊」、第2号（1982）、pp. 1-8

「エセ・佐川一政」、第5号（1985）、pp. 34-39

「戯れの名称学<sup>オノマステイク</sup>--アノミー状況と対峙して--」、第6号（1986）、pp. 11-17  
『『プラトーン』を観て--オナニズムを越えるために--』、第7号（1987）、pp. 21-24

「人を食った「話し」」、第8号（1988）、pp. 7-16

「若者よ、君はもう男になったか?」、第10号（1990）、pp. 28-30

（翻訳）ネゴヴァン・ラジッチ、「モグラ男（一）」、第11号（1991）、pp. 1-14

（翻訳）アンヌ・エベール、「急流」、第14号（1994）、pp. 56-83

「「私」と「小説」--『白き処女地』のことなど--」、第16号（1996）、pp. 32-34

「虚構の崩壊」は、小説論である。小畑によると、小説の作者は世界（現実）を理解し（読み）、それを単純化したり、ある点を誇張したりして、小説のなかに再構築し、いわば図式化していく。小説は、再構成され図式化された虚構の世界であり、本来的に恣意的である。「八〇年代の現在」、世界の読み方は、あいかわらず一九世紀生まれの、写実主義（「現実社会の問題や意味を知的に究明し、またそうしうるとする主知的人間中心的世界観」と説明されている）、マルクス主義、精神分析によっており、硬直している。そのために、本来「特異性を特徴とし、日常的なものを活性化させる」芸術性を担うべき虚構が「平均化され、一般化され」、その本来の役割を果たせなくなっている、と小畑はいい、まさに1982年に生じた女子銀行員によるオンライン詐欺事件を取りあげ、それを題材にした小説やテレビドラマの読み方に、その実例を指摘する。ようするに、小説にかぎらず、わたしたちが現実を読みとるときにも、特定のパターンに従いがちだというので

ある。そのパターンを、小畑は「物語性」と呼ぶ。「物語とは既存の構造に従って作られて」おり、「この既存の構造＝物語性は本来虚構であるのだが、一般化して自然なものとなっている」という。論文の終結部にいう。

ところが、現実を見直し新たな意味を探ろうとするとき、物語性はわれわれの目をくもらせることがある。それはむしろ邪魔になるのである。そして、刻々と変化する現実に対応しきれなくなると、物語性は自然なものとは感じられなくなり崩壊するのである。

現代が現実先行の時代であることは多くの人が認めるところだろう。先行する現実を把え、物語性を再構築することはもはや不可能なのだろうか。

小畑は、1980年代を、「物語性」が生命力を失い、現実コミットできなくなった時代だとする。小説もまた、かつて（19世紀に）有した力を喪失している。だが小畑は、文学の将来を達観する。以下のように論文を結ぶ。

文学がもし何か為し得るとするならば、まさにこの面においてではないだろうか。文学は物語性を破壊しながら絶えず新しい物語性を目指してきたのだから。

ロブ＝グリエ研究で培われた文学理論と現実社会への鋭利な視線とに支えられた、小畑の持ち味というべき理知的で即物的な表現が、若き日、すでにして印象的である。

「虚構の崩壊」につづいて『とい』に掲載されたどの作品も、ジャンルは違っても基本的に、「物語性を破壊しながら絶えず新しい物語性」をめざす実践だったとあっていい。小畑の目指すところは、若き日にすでに明確に定まっていた。それは、世界の新しい読み方、新しい物語性を、現実を権威や伝統から自由に把握しようとする不断の実践をとおして構築することにほかならなかった。若い国家であるカナダで生まれたフランス文学への深い関心の出所も、ここにある。季刊『千年紀文学』に書き続けた多くのエッセイも同様である。小畑にとって、それこそが現実とコミットすること、生きることにほかならなかった。

このように、小畑の文学観・小説観は、あくまでも健康で、肯定的・楽観的である（小畑がのちに明治大学ラグビー部部長を引き受けたことは、わたしには自然なことのようと思われる）。わたしは『とい』で理解できた小畑の文学観を好ましく思いつつ、『千年紀文学』に掲載されるエッセイや送ってくれる様々な著作を読んできた。

15年ほどまえ、上京中に、明大前の沖縄料理店でひらかれた小畑ゼミのコンパに誘われたことがある。たまたま小畑の誕生日で、最後に学生たちからバースデー・ケーキが送られた。小畑が、学生たちとほとんど同世代であるかのように気さくに学生たちに接し、学生たちも小畑を慕う姿を目の当たりにしたものだ。

そのおり、「小説が書きたいんや」と、小畑は関西なまりでいった。それ以後、節目ごとのメールのやりとりのなかで、「小説が書きたい」という心底からの望みを、小畑はなんだか語った。新たな物語性を手にしようとしていたのかもしれない。じっさい、『とい』の最後の作品となった、「私」と「小説」--『白き処女地』のことなど--という短いエッセイを、自分は有言実行が好きだといったうえで、以下のように結んでいる。

わたしはぐうたらである。束縛されるのは大嫌いである。しかし何もしないとやはり落ちつかない。「有言」は私にとって、「押しつけだ」という言い訳の効かない、自由という名の束縛なのである。

わたしは小説を書こうとしている。

これは20年近くまえの決意である。小畑が、その後じっさいに小説を書いたのか、わたしは知らない。世界を理知的に過ぎるしかたで読み、世界の骨組みを透視し、的確に、しかしいつもユーモアを忘れずに批判することにたけた小畑が、曖昧で不透明なものをかかえこまざるをえず、ときに多義性と象徴性を必要とする小説を、どのように組み立てどのような文体で肉付けするのか、考えるだに興味はつきない。その興味は満たされることができなくなった。残念だ。小畑にとっては無念きわまりないことだったにちがいない。

『とい』というみすぼらしい小舟に、心底からの作品を9編も託してくれた亡き小畑に、こころより感謝する。

(2014年5月)